



Rotary Weekly



広島空港ロータリークラブ週報

2020年2月26日発行

2019-20年度
国際ロータリーテーマ

会長 佐々木正親 / 副会長 熊谷祐司 / 幹事 川本吉則 / SAA 伊藤佳子
事務局 三原市本郷南6丁目3-26番地 三原臨空商工会 2階
TEL 0848-86-0986・FAX 0848-86-0992・E-mail h.kukorc@vega.ocn.ne.jp
例会場 広島エアポートホテル TEL 0848-60-8111

3月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
休会 例会 例会 IM 休会

本日のプログラム (2月26日)

森崎正治 会員
「私とロータリー」

次回のプログラム (3月11日)

三原市役所 保健福祉課 保健師 中本恭子様
「大人の発達障害について」

第1178回 2020年2月19日 例会記録 (フォレストヒルズガーデン)

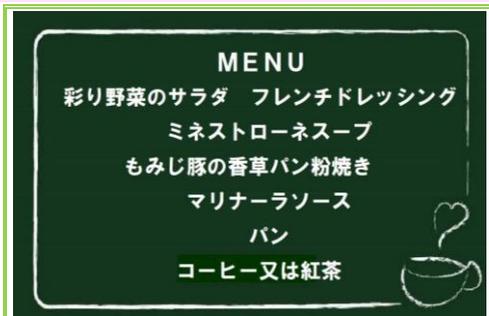
ラジオ体操 (12:25~)

点 鐘 佐々木会長
国歌斉唱 ロータリーソング「四つのテスト」

出席報告

	会員数 名誉会員	出席者	メイク	欠席 (免除)	出席率
本日 (2/19)	29 1	18 1	1	6 4	76.00
メイク	灰谷				
前々回 (1/29)	29 1	18 1	4	4 3	84.62
メイク	灰谷・近藤・鶴田幸彦・橋濱				

食事時間



会長時間



今年度初めにも皆様にお願ひしましたマイロータリーアカウント登録の件ですが、現在広島空港RCは62%です。澤井さんが次年度ガバナー補佐になれる時には100%になれるように頑張りたいと思いますので皆さまご協力のほどよろしくお願い致します。

幹事報告

- 《配布物》週報1177・1178号
ロータリーの友・ガバナー月信
- 《回覧》出欠表
野球同好会練習試合
広島空港RC親睦ゴルフコンペ4/12
ロータリー手帳予約
沼田川クリーンキャンペーン



名誉会員 益谷昌治 様

「2020年のマーケット展望」

卓話のテーマとしては、時機を逸したように思いますが1月22日の証券セミナーに出席した資料を基に話してみたいと思います。

2020年相場は、期待の持てる1年になるだろうと思っておりました。しかし、今回の新型コロナウイルスの感染拡大が、消費と生産の両面に及ぶこととなり、日本経済に大きな打撃を与えたことになりました。感染拡大は終息が見えず、日本経済を不安の連鎖が覆い始めた。海外投資家からは、日本が感染当時国になりつつあり、日本株の買いはしばらく敬遠されるようである。

最も影響ある業種としては、自動車など輸送用機器関連は減益となるようである。国際旅客や、貨物需要の下振れを見込む空運、陸運関連の減益が大きい。小売業は、増税に伴う消費低迷や、全国的な訪日客減少への警戒感が強い。…減収、減益となる。

「大和総研」は新型肺炎の流行が一年程度続いた場合は「日本の実質 GDP への影響は少なくとも1%以上見るべきだろうと」指摘し、この結果、2020年はマイナス成長に陥る可能性があるとしている。もっとも、相場の先行きは常に読み切れないもので、今回の新型コロナウイルスによる肺炎(COVID 19)を巡る問題のように、どんな突発事態が生じるか分からないというリスクを肝に銘じておくことである。何としても、一日も早い終息を願い2020年が経済発展し株式相場の上昇につながることを期待したい。

2020年の注目銘柄

注目材料は、5G(第5世代通信規格移動通信システム)関連の銘柄である。

注「5G」はインフラストラクチャー(Infrastructure)…略して「インフラ」ともいう

ローカル5Gとは、企業や自治体などが次世代通信技術を「5G」使って築く自前のネットワークのこと。

日本も2020年、今年の春には商用サービスを開始し、一斉に「5Gスマホ」が発売されるようである。スマホは「5G」の世界のほんの始まりに過ぎず「5G」の世界は膨大に広がることになる。

三菱UFJFGとリクルートが共同出資会社を設立するなど異業種間の提携が相次ぐ。

「5G」を軸にした提携再編、M&Aの動きは全産業界に広がりそうである。これだけ世界中が前のめりになっている現象は珍しく「5G」はインフラそのものなので、とんでもない広がりやスケールの大きな成長をもたらすようである。

干支に因む相場格言

『辰巳(たつみ)天井、午(うま)尻下がり、未(ひつじ)辛抱、申酉(さるとり)騒ぐ、戌(いぬ)笑い、亥(い)固まる、子(ねずみ)繁栄、丑(うし)つまずき、寅(とら)千里を走り、卯(うさぎ)跳ねる。』である。

昨年の亥年相場は、格言の通りの下値が固まった年であった。8月には一時20,200円台をつけ、「2万円割れも」の声さえ上がった。しかし、年末にかけて外国人買いが復活し、日経平均は連日で年初来高値を更新し23,000円台に戻した。今年「子」年は下値を固めた後に2018年10月に付けた24,270円に再挑戦する年になりそうである。

前の子年(1908年)には、ノーベル賞を受賞した日本人が、物理学賞と化学賞を合わせ4人も出ている。2020年(子年)今年も日本人からのノーベル賞受賞が出れば、日本再評価の機運が高まる…外国人買いが再燃する可能性もある。

陰陽学とはまったく趣を異にするが、西暦末尾が「ゼロ」の年は相場が急落するとのジンクスを指摘する向きもある。日経平均が史上高値の38,915円を付けたのは、1989年12月であった。翌1990年は急落し、安値20,200円まで下げた。2000年はITバブルの崩壊で下げ、2010年は円高の急な進行で下げに転じたことからして、今年2020年は末尾ゼロの年であるので株式投資は慎重であることも必要である。